

ビッキ

私達の子供の頃、田舎で蛙を「ビッキ」と云った、田舎の子は蛙（カエル）と云つても何だか分らないし、都会の子は「ビッキ」と云われても分らなかつた。

妻が幼い子供、洋一と二郎を連れて矢附の生家に里帰りした時のエピソードを話してくれた。

大河原で汽車を降り、バスに乗換える。あの当時は蒸気機関車で、バスは「ボンネットバス」。永野の一つ手前の松川橋で降りる。生家迄、三十分はかかる。二郎をオンブし、片手にオシメや着替え、お土産を持ち、洋一の手をつなぎ、トボトボ歩き出す。

少し歩くと洋一は、疲れた、足が痛いと言つて歩きを止める。無理もない、洋一は二、三才、田舎は砂利道である。洋一をダツコしたり、なだめて歩かせたりして一時間位かかり、やっと生家に辿り着く。

着いたとたん、げんきんなものである。庭を駆けずり回り、近所の子供達とドロコ遊びである。きれいな着物を着せて来たのに、着物は泥だらけ。顔も泥が付き、これが我が子かと呆れたと言つていた。

洋一は蛙を捕まえ、蛙だ蛙だと、大喜び、二郎もヨチヨチ追いかけて兄弟仲よく遊んでいた。近所の子供達は、蛙と言う言葉を知らない。近所の子供達は「おがすいなやー、洋ちゃん『ビッキ』ば、『かえる』と言つんだよや」と教えに来る。四十五年位前の実話である。

帰りは大変、米等を貰うが持てない、父与三郎が停留所まで送ってくるが、可相そうだと、大河原迄来てしまふ。大河原まで来て、「仙台まで送って行く」と、とうとう家まで送つて来た。一晩泊り次の日帰っていく。親心とはいえ、本当に優しくした。

今、父の孫に対する思いやり、無邪気な子供達を思い出し、亡き両親を偲び、あの情景を胸に描く。